



戦争の記憶といのちの大切さ

毎年、コアラ新聞8月号では、平和について考える特集記事を掲載しています。

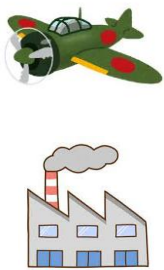
今回は、東毛地域にお住まいのAさん(仮名)から、当時の地域や、くらしの様子についてお話をうかがいました。

戦時中の東毛地域の様子

※以下、Aさんの談話

太平洋戦争当時、私は小学生でした。あれから79年が経ちますが、当時のことはよく覚えていきます。

太田や大泉町には、中島飛行機(現スバル自動車)の大きな工場がありました。工場では戦闘機を作っていて、地域の人たちがたくさん工場に働きに出ていました。



こうした工場は、何度も空襲の標的となりました。爆弾を落とすのは、米軍のB29爆撃機(ばくげきき)です。かなり低い高度で飛んでいて、地上に人がいると機関銃を撃ってきました。夜には焼夷弾(しょういだん)を落とすと、一帯を焼き払っていきました。



戦禍と隣り合わせの日常

あの頃は、どの家にも防空壕がありました。私は小学校に通っていましたが、学校に着く直前に空襲警報が鳴り、慌てて自宅に戻ることも何度もありました。

小学1年生の時に担任だった先生が空襲で亡くなったたり、通学路に不発弾が落ちていることもありましたが、今考えると恐ろしいことですが、当時の私は小さかったためか、あまり怖さを感じていませんでした。



疎開先での苦労と食料不足

空襲が多くなると、私達の家族も親戚を頼って疎開することになりました。親戚は農家を営んでいましたが、厳しい食料事情もあり、食べ物はいくら分けてもらえませんでした。結局その後、疎開先を離れ、別の所へ身を寄せることになりました。

食料の確保は本当に大変でした。今思えば、一番辛かったことは、食べる物がなかったことでした。私の家では、サツマイモやカボチャを麦めしに入れて「かさ増し」していました。

当時、日本中で食料や物資が不足していました。米の配給はありましたが、全く足りませんでした。みんながヤミ市で、米や生活必需品を買っていました。



ヤミ市(非合法の市場)の様子

終戦後の混乱期を生きる

終戦後も食料や物資の不足は変わりませんでした。

学校では、進学する生徒と、それ以外の生徒に分けられました。進学組が勉強に励む一方で、それ以外の生徒は、野菜づくりや売り歩きなどの作業に従事しました。野菜を売って稼いだお金は、学校の備品に充てられました。



戦時中から戦後にかけて、生活環境や学校、社会の様子が大きく変わりました。その中でも、とにかく無我夢中で、必死に生きていたように思います。

Aさんのお話をうかがって

今回、Aさんから戦時中の貴重なお話をうかがうことができました。戦中・戦後の時期に比べれば、今の私たちの周りには、食べ物や物資が溢れ、平和な家庭や地域社会が当たり前のようにあります。

しかし、Aさんのお話を聞いて、こうした「平和」は、決して当たり前のものではないと強く感じました。



戦後から約80年、日本が平和を維持することができたのは、戦争の苦い記憶と教訓から学んだ、先人たちの不断の努力の賜物(たまもの)です。

今、ウクライナやガザで、多くの人びとが戦禍に巻き込まれています。戦争で矢面に立たされるのは、権力者や指導者ではなく、いつも一般の市民です。

命の大切さと平和の尊さを忘れずに、先輩たちからの教訓を胸に、平和な世界と安心して暮らせる地域のために、私たちひとりひとりが、できることから取り組んでいくことが大切だと感じました。



(塩原)

『モスキートデー』って何？

8月になり連日続く猛暑に加え、今年も『蚊』の存在にお困りではないですか？イギリスの細菌学者であるロナルド・ロスが、1887年の8月20日に、蚊の体内からマラリア原虫を発見したこと、この日は「蚊の日」「モスキートデー」と呼ばれています。それにちなんで、世界各国でも蚊についてのイベントやキャンペーンが開催される日なのです。



知っておきたい『蚊』について

夏は昆虫が活発に活動する季節です。その為、蚊の活動時期も夏場だけと思われがちですが、実は1年を通して活動する蚊も存在します。

蚊の活動には気温が関係しており、最も活発になるのは一般的に22〜30度の間といわれています。夏の朝方や夕方、気温が25度前後になる時間帯が最も活動的です。

一方で、蚊は高温に弱く気温が35度以上になると動きが鈍くなるため、日中は蚊の姿を見かけることが少なくなります。



しかし、軒下や木陰などの涼しい場所に身を潜めている可能性があるため、油断はできません。



蚊も私たちと同様に、夏場は涼しい場所や気温を好みます。私たちが快適と感じるような場所こそ、とくに注意が必要です。

『アカイエカ』という蚊は、気温が10度を下回ると休眠状態になりそのまま冬を乗り越えます。『チカイエカ』は屋内の生活に適応した蚊です。気温20度前後の条件が満たされた建物の内部であれば1年中繁殖し、吸血・産卵を行います。冬に蚊に刺されたという経験がある方は、チカイエカの可能性が高いです。



蚊が人や動物の血液を吸うのは産卵にエネルギーを沢山使うためです。蚊には決まった産卵時期は無いですが、気温が20〜30度で活発に産卵をします。夏場に蚊に刺されやすいのはちょうど蚊の産卵に適した時期であるからです。ちなみに、卵を産まないオスの蚊は花の蜜や樹液を吸っているようで

刺されたらどうしたらいい？

蚊の害で最も気を付けなくてはいけないのは、「日本脳炎」「マラリア」「デング熱」「黄熱」「フィラリア症」などの恐ろしい伝染病です。特に熱帯地域では、毎年50万人を超す死亡者が出るなど、人間を死に至らしめる最も凶悪な「媒介」でもあるのです。



人が蚊に刺されると、麻酔効果のある蚊の唾液によりアレルギー反応を起こし、痒みや腫れなどを発症します。刺された直後から症状が出て、数時間程度で症状が治まる「即時型反応」と、しばらく後に症状が出て、数日から1週間程度かけて軽快する「遅延型反応」があります。

刺された部分は、掻いてはいけません。掻くことが刺激となつて炎症が広がり、さらに痒くなるという悪循環になる可能性があります。また、掻き壊すことで皮膚が傷つき、そこに細菌が侵入して化膿したり、色素沈着を起したりする場合があります。

痒みを感じたら、患部を濡れタオルや冷水をあてて冷やし、痒みをしずめましょう。痒みが強い時や、患部に赤

みや腫れがある時は、炎症が起きているサインです。患部を洗って清潔にし、ステロイドなどの外用剤などを活用しましょう。何かお困りごとがあれば、店舗職員にお声がけください。



通常、蚊による虫刺されの場合、痒みや赤み、腫れが続いても、数日で軽快します。しかし、蚊に刺された部位以外にも痒みや腫れ、水ぶくれなどの症状が出ている時や、発熱・めまいなどの全身症状がある時は、すぐに医療機関を受診しましょう。また、痒みや腫れのある部位に対し、ステロイド外用剤を5〜6日間使用しても症状が改善しない、または悪化している場合も受診が必要です。

身近な存在であり、毎年のように対処に苦労するかと思います。正しい知識と対応方法を知ること、少しでも快適に蚊のシーズンを乗り切りましょう。



参考：健康会 高橋医院IP、フマキラーIP、ヒフノコトサイトIP

(角田)

編集後記

『素敵なお年寄りを目指して』

いきなりですが私は50歳を目の前にして年を感じるようになってきました。もちろん年齢とともに内臓の機能や免疫力、体力も低下します。大きな病気を抱えるリスクも増えます。家庭環境も変化し、子育てが終わり寂しく感じることもあります。



皆さんは前向きに人生をとらえていますか？

私は「老い」を味方につけて前向きに暮らしたいと思っています。私が好きな言葉に「年を重ねる」という言葉があります。今までの人生で体験した楽しいこと、苦しいこと、辛かった経験、すべてを積み重ねて豊かな人生を歩んでいきたいです。

(高橋智)

